

1. はじめに

国際平和ミュージアムの学芸員、田鞆と申します。建物リフレッシュ工事、展示施工、現代部分を中心に担当しました。

今まさに足の踏み場もない状態の展示室で作業をしている最中なので、振り返りながらご説明するのも不思議な気持ちです。田島さんの話にあるように、館内の内装を全て改修したため収蔵資料46,000点近くを全て外部に移転し、それを新収蔵庫に戻す作業も並行して行っています。私の方からは、平和博物館で展示を作ることがどういうことだったかという観点からお話をし、後半のお二人につなぎます。

博物館で平和を展示することをどう考えて試行錯誤したかについて触れたいと思います。博物館という学びの空間での体験、その場に行かないと体験できないことを博物館体験という言い方もします。物事を知りたい、深い知識を得たいだけであれば、専門書を読めばいい、講演会も学習会もあるし、どのような手段でも知識を得ることはできるかもしれない。でも博物館という空間に来ることの醍醐味、そこでしか伝わらない大事な部分は何だろうか、私自身は学芸員としてその根本的な部分に常に立ち返りながら、展示製作に臨んでいました。

博物館は物理的に資料を展示している場所である、という単純な話でもありません。ただ資料が置いてある、写真で説明しているだけでは意味をなしません。一番重要なことは、ある物事について資料を通じて全く違う視点から知識を得ることができる、そうした知的な博物館体験を提供することだと私は考えています。その体験を通じて来館者は当初予想しなかった発見ができる場が博物館です。その意味で、平和について想像もつかなかった何かを獲得できる場をつくることを意識してきました。一方で平和を主題としてどんな新しい驚きと発見を提供できるか、平和創造という概念を展示空間に落とし込むことの難しさが今回のリニューアル事業で直面した一番の

困難だったと感じています。結果としてどのように解消したか、もしかしたら解消されていないと感じる方もいるかもしれませんが、実際の展示室を楽しみにしてください。

2. 来館者は見えているか

さて前回の講座でも述べられたように今期のリニューアルは、基本計画に「戦争の記憶を共有するミュージアム」「平和創造の場となるミュージアム」「平和創造を支える調査研究活動の拠点となるミュージアム」というコンセプトを骨子に掲げて実施してきました。

根底には、戦後80年を迎えようとする現在、戦争の記憶を伝えることがそのまま平和創造へとつながる構図、平和教育の考え方が、容易には社会全体で共有し難くなっているのではないかという問題意識がありました。これまで当館のみならずさまざまな人々、活動を通じて戦争の記憶を伝えてきましたし、これからも平和創造を担う次世代へつないでいく使命を考えるのは当然です。一方で、博物館には多様な来館者がいます。相手に向けてただ伝えたいことを提示するだけが果たして博物館の展示でしょうか。展示を通して伝えたいことは山ほどありましたが、その時に「来館者は見えているか」と自分に問いかけてきました。通常、展覧会を作る時には無意識に考えることですが、来館者の存在をこれほど意識せざるを得なかったことはなかったと、振り返って思います。

我々が見るべき多様な来館者、なぜそれほど来館者像にこだわったのか、戦争体験の継承という観点から私自身にとって印象的だった事例をご紹介します。

写真は当館収蔵の旧満洲国の国旗(写真1)と、十五年戦争中に軍隊を除隊した際の除隊記念徳利(写真2)です。一次資料を通じた講座などの一環で、収蔵資料を学生や来館者に解説することがあります。専門知識がある人、ない人もいますが、10代、20代の少なからぬ見学者たちがこれを見て、「かっこいい」という感想を漏らします。五族共和を象徴



写真1 旧満洲国国旗



写真2 除隊記念徳利

した5色の本質が何を意味するのか知らないために、見た際の視覚的な印象で受け止めたままを語ってしまう。金箔がほどこされた桜の意匠を見て、その一言がふと出てしまうのでしょうか。知識があれば別の感想を持つのかもかもしれません。教養不足といえどもそれまでもかもしれませんが、現実に使ったことも、接したこともなければ、仕方のない反応ではないでしょうか。つまり、これらの資料は過去に起きた戦争にまつわる多くの記憶を内包している資料ですが、少なくとも単に見た、提示しただけでは、次世代の平和創造へ向けた継承どころか、資料の意味さえ伝わらないという現状があるのです。

また、「愛馬の日」プロパガンダのポスター（写真3）を見たある学生は、最初、動物愛護ポスターと感想をもちました。しかし、一体これはどういうことなんだと、もう一步踏み込んで自分で調べます。そして軍馬の存在と、人も馬も全て戦争に加担して社会構造に気づき、国家総動員体制の内実を自分の学習体験の中で得たということを経験に記しました。最初から情報を全て提示して、歴史的背景

や資料の持つ意味を伝えることも勿論大切ですが、この学生のように自ら疑問をもち、自ら解にたどり着く体験は、誰かに与えられた知識よりも一層得難いものではないでしょうか。

専門知識にあふれる人ばかりではない、多様な来館者に接するにつれ、単に資料や歴史事象を展示するだけでは何も伝わらない、むしろ事細かに解説するよりは、自ら読み解く動機を作ることが今を生きる若者、来館者にとって歴史と向き合いながら自分自身にとって平和を考える契機になるのではないかと、考えるようになりました。

社会の記憶としての（十五年戦争、アジア・太平洋戦争の）前提となる知識が徐々に失われつつあり、同じ記憶を共有することが難しくなっている中で、どうすれば記憶や体験を継承することができるのか。最初はどうようなきっかけであろうと、最終的に平和創造へとつながる道はどう築いていけるのか。展示制作の過程で直面した伝わる、伝わらないという課題や困難は、むしろこれからの平和を考える課題解決への糸口でもありました。資料を紐解き伝える平和博物館の意義と役割はそこにあるのではないかと考えます。

3. 展示コンセプト Peace × Piece

次に、展示装置としてのコンセプトの話をしてします。それは全体の理念を博物館の常設展示場の空間に表現、デザインしていく際に必要なものでもありました。この展示コンセプトにたどり着くまで本当に長い時間がかかりましたが、経緯についても触れたい



写真3 セロファンポスター「愛馬の日」

と思います。

先生方の紹介にあるように展示は年表展示とテーマ展示で構成されています。年表を作るにあたっては、1840年から2022年までの様々な事象を骨子としますが、当館独自の年表を構成していく過程である問題が浮かび上がりました。各時代、分野で専門家の方々の知恵を持ち寄り、個別持ち寄ったものを列挙したところ、あまりにも文字が多く専門的な内容となり、一見すると事象同士や展示の流れが見え難くなっていました。勿論、学術的に信頼のおける意義深い内容であることは間違いないのですが、どういったつながりを持って時代を描いているのかが全く分からない、ということ展示制作会社の方に指摘されました。展示する側は、理解してほしい、大事だと思って提示します。ただ、それらが重要で大事なのはわかるが、なぜ提示されているのか、それぞれのつながりや関連性が、前提の知識のない人間には分からないということ、何度も指摘されました。如何に概念図化し、わかり易くするといった悩みぬいて、怪しい奇妙な図(図1)が出来上がったこともありました。

ただ、もしかしたら分かる、分からないという感覚は、知識の欠如の問題よりも既視感に似たところがあるかもしれません。どこかで目にしたことがあるとか、どこかで聞いたことがある単語や、何かそ

のことを知っているという既視感がないと、何を見ているか分からない展示になってしまう。社会が共有してきた戦争の記憶と戦後80年の現実を改めて認識しました。

時間軸とテーマをどう見せるか各時代毎の研究者、担当者を悩ませながら何度も逡巡した結果、時代のつながりが容易には判別しにくい点を敢えて積極的に強調することにしました。個別に独立して見える事象は、本当は大きな歴史の中で連関しており、1840年に起きたことが実は1990年、2000年代の問題の根底に流れている、その関連性やつながりを補って見ていくこと、事象同士の意味を理解することが平和を考え何かをつくり出すヒントにつながるというコンセプトを明確に打ち出すことにしました。来館者が自分なりに歴史の流れと平和のイメージを持つことを目指して、平和のPeaceと欠片のPieceの言葉をかけて、ピース×ピースというコンセプトとなったわけです。この境地に至るまでに一年半以上かかりました。

概念上の話に偏ってしまっていますが、つながりをどう見せていくか、どう気づいてもらうかには工夫を凝らしています。各時代の狙い、見るべき要点は平易な文章にして、証言や手記でその時代を生きた人、当事者の視点を伝えています。また全体に「問い」を設定し、実際に考えてもらいたいポイントを問い

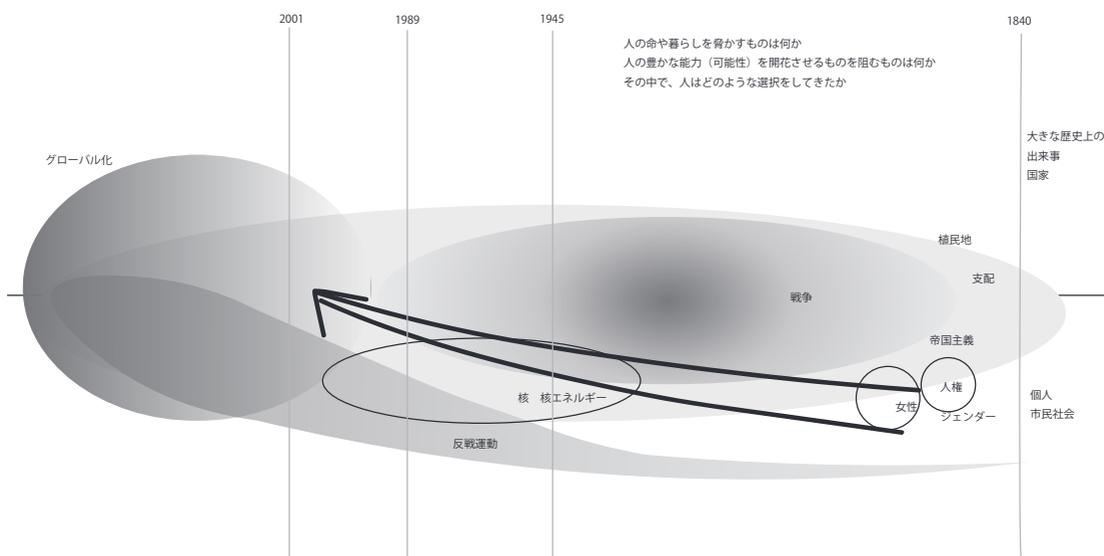


図1 年表の概念図(試作)

かけ、その問いを考えることで時代の流れや、我々が提示している内容のつながりに気づいてもらう仕掛けを用意しています¹⁾。

4. 展示素材、Pieceを集める

一次資料、映像素材、写真など、展示を構成する素材は当館収蔵品だけではなく、各事象に関わった当事者からの借用資料も含まれています。そこには資料一点、写真一枚に込められた思いとの出会いがありました。他の博物館、公文書館などでアーカイブ化された資料以外にも、個別の団体や個人が持っている写真は、当然ながら一点一点に込められた思いがあるわけです。展示場で表現していく過程の中で、我々自身も資料と出会い直した気がします。誤解を恐れずに言えば、展示での取り上げ方について率直に正されたことは何度もあります。紹介する言葉の一つ一つ、表現の仕方が、意味合いが違うという指摘を受けました。展示する際には徹底的に調査し解説しているつもりであっても、当事者の立場に立つと、限られた空間の中で全てが表現しきれない故のもどかしさもありました。一例を紹介します。

1989年から97年の時代の年表では、北海道平取町二風谷ダム建設に伴い、ダム湖に沈むアイヌの里を紹介しています。現地で紹介いただいた写真を使って、当初ダムに沈むことに対して抗議をしている姿として解説していました。この展示エリアが、市民社会が異議を申し立て、声を上げていく時代でもあり、一連の流れで取り上げてしまいました。しかし当事者の方々から、いや、そうではないんだ、この儀式はずっと伝えてきた土地、神聖な地域がダムで沈んでしまうことを先祖に対して謝っている、そういう儀式だということを改めてお聞きしました。どこかで自分達の言いたいことを誇張して表現してしまったのではないかと反省した点でした。

2000年代の先住民の権利に関する国際連合宣言を紹介しているところでは、樺太アイヌ協会の方の言葉を取り上げています。その縁で植民地・占領地をテーマとしたテーマ展示1でも関連資料についてお尋ねし、展示素案お見せしたときご意見を伺い

ました。「帝国日本の占領地・植民地」というテーマに則した資料の選定途上でしたが、これは「和人」の視点ですね、とおっしゃいました。当地に住んでいたアイヌの方たちにとっての展示というのはどういう事なんだろうと、どう展示資料と向き合うべきかを問われた気がしました。戦争を多角的に捉える、多様な視点、多様な立場を取り上げることを意識していましたが、見る相手がどう受け止めるのかという視点を改めて教えていただきました。

テーマ展示3は、戦後、傷ついた人々の声を聞くということ、人の尊厳を回復するには何が必要なのかをテーマにしています。グアテマラ内戦時に多くの先住民のマヤの方たちが誘拐され、虐殺された事例も取り上げました。その中で、先住民の方として初めて国会議員にもなり、自分たちの家族を捜すという、秘密墓地を発掘しながら活動したロサリーナ・トゥユクさんを紹介しています。最初は、マヤとしての民族の誇りを取り戻すための活動という視点で、その方を紹介していました。ところが、皆さんと共に活動されている人から、この方たちは、本当にやむにやまれず集まった人たちだと、決してマヤ民族全体の大きな話ではなくて、自分たちの夫だったり子供だったり家族がいなくなり、マヤの価値観として家族をきちんと自分たちの手で埋葬したいという、そういう切実な思いの中から活動している人たちなんだ、と教えていただきました(写真4)。結果的に、展示する側が自分たちが言いたいこと、一部を切り取って表現してしまっているのではないかという反省点も多々ありました。



写真4 コナビグアのメンバー女性たち(撮影:古谷桂信)

資料提供を断られたこともありました。恐らくこ

うした一部を切り取ってしまうということに対して懸念があったことと推察します。全体像の中から見たいという、資料に関わる人たち各々の思いがあり、そのことと向き合う機会の得られた貴重な時間でした。

以上はごく一例で学芸員それぞれに一点一点資料を介した出会いがあったと思います。博物館の資料の背景にある物語を我々が媒介し、展示を通して公に届けていく責任を再認識しています。

5. 展示空間で表現する、Piece を Peace に

集めた素材を空間として表現する作業が展示を仕上げる大切な部分です。知識を本にしたり、単に解説したりするのではなく、博物館という空間に来て意味あるものでなくてはならない。担当した現代エリアの最大の課題は、過去と現代をつなぐということでした。過去の歴史、記憶を現代の平和創造につなぎ、空間にどうやって表現するか苦心しました。今、起きていることの物事の背景を喚起するような、自ら疑問を持てるような展示装置として、「問い」かけなどの要素にこめています。

今、自分たちに起きていること、自分たちの現在を知るということは、歴史の中から平和を希求してきた人々の歩みを知ることでもあります。先ほど紹介した戦後のテーマ展示3は、どこかの誰か傷ついた人たちの歴史を知ることだけではなく、多くの困難を抱えた人たちがどうやって自らを語り始め尊厳を回復していくか、個人史に触れる場です。同時に、今もしかしたらこの場に立っている人も現実に困難を抱えているかもしれない、語れない何かを持っているかもしれないことを想像しました。そうした人たちが、自分の話として置き換えて考えてもらえないか、誰かの平和ではなく自分にとって尊厳を守ることにしても、考えてもらえるような展示をめざしました。

国際機構と市民社会でつくりだす平和創造を具象、具現化しようと試みているのがテーマ展示4です。インタラクティブな試みを取り入れ完成形ではなく、いかに来館者との相互のやり取りが可能となるか、

主役である来館者を迎えてから発展させていきたいと考えています。

6. 博物館として

常設展示だけではない、博物館としてのリニューアルという側面も強調したいと思います。なかでも展示機能を強化する意味では展示室としての仕様も整えています。常設展示で平和の理念を伝える傍ら、平和創造を表現し、展示することが可能な空間に仕上げました。歴史資料の展示、現代の報道写真の写真展や、最近では戦争や人権をテーマにした芸術作品など、平和を伝える手段はたくさんあります。多彩な平和創造を見せる活動が展開できる施設整備を目指しました。企画展示室も利便性と展示演出面を考慮し、床材・壁紙までこだわりました。それはこの博物館が市民活動からつくられた博物館であることも関係しています。市民活動を支え、発表の場としても使ってもらいたい、特別な技術がなくても展示を通じた情報発信と相互の交流が可能な場として提供する意図もありました。

博物館の心臓部と言える収蔵庫機能の拡張も行っています。当館の核となる平和のための京都の戦争展コレクションは、持ち寄った人たちにとっては日常にあったものが、使いやすさ分らなくなっている時代です。一次資料が持つ背景や物語を共有し、今まで伝えてきたもの、80年伝わってきたものは今後100年、200年伝えていけるような、収蔵庫に改修しました。

過去を共有する資料を保存する収蔵庫、今の平和をつくる、考える展示空間、博物館機能全体で具現化を試みたリニューアル事業でした。

7. おわりに

来館者には最後は上を向いて出ていってもらいたいと、追及してきました。理想論で終わらせず、平和創造のために何ができるのかということ考え、少しでも前へ進む勇気を持って帰ってほしいと考えています。理念や概念が先行している面は否めません

が、それはむしろ大学立博物館ならではの役割ではと考えています。来館者自身が新しい疑問をもち、何ができるか試行錯誤する場、来館者のつぶやきを素直に受け止めて、皆さんの内から湧き上がる気づきと対話ができる博物館の完成を目指してきました。中身に関わって下さった方々、建築、展示施工をはじめ、多くの皆様の思いと力でリニューアルした博物館です。これから来館者とともに成長できる博物館でありたいと思います。ご清聴ありがとうございます。

【注】

- 1) 「問いかけ」のあり方は、学生スタッフリニューアル展示ワークショップを開催し検討を重ねた。全12回(2022年4月18日(月)～9月30日(金))のワークショップには、当館の活動に関わる本学の学生スタッフ総勢13名が参加した。参加学生は構想段階にも関わらず、ある意味最初の見学者として展示製作に貢献してくれた。学生らの活発な議論の成果もまた、今回の展示を構成する重要な要素の一つである。また開館後、大学立博物館として博物館と学生とで活動を展開していく基盤ともなった。今後の教育普及活動を含めて改めて報告の機会をもちたい。